

問題の所在

『命題論』の第12章でアリストテレスは、可能様相を含む命題について、その命題を否定した命題は何であるかについて考察している。アリストテレスの考察は以下のような手順で行われる。まず彼は、無様相命題の肯定と否定の關係に着目する。‘είναι ἄνθρωπον’の否定は‘μὴ εἶναι ἄνθρωπον’であり、他方‘είναι λευκὸν ἄνθρωπον’の否定は‘μὴ εἶναι λευκὸν ἄνθρωπον’であることから、様相命題も場合も同じように、‘είναι’を否定することで、否定の命題をえることができるのではないかと推測する。ゆえに、‘δυνατὸν εἶναι’の否定は、‘δυνατὸν μὴ εἶναι’ということになる。しかし、この結論は不合理である。なぜなら、「切ることや、歩くことが可能なものはすべて、歩かないことも切られないことも可能である¹」ように、‘δυνατὸν εἶναι’と‘δυνατὸν μὴ εἶναι’は否定と肯定の關係になっていないからである。それゆえ、‘δυνατὸν εἶναι’の否定は‘δυνατὸν μὴ εἶναι’ではなく、‘μὴ δυνατὸν εἶναι’とするべきであるとアリストテレスは主張する。

以上の考察をはじめとして、『命題論』の第12章と第13章では様相命題が一部省略されて、‘δυνατὸν εἶναι’などの表現で議論がおこなわれている。この様相命題の肯定と否定の対立に関する議論に対してアクリルは、この省略された表現は‘dangerously ellisptical’なものであると言う。彼は、アリストテレスが様相命題を省略せずにすべて書き出して無様相命題と比較していれば、複雑な議論は必要無かったと考えている。この時アクリルは様相命題全部を‘It is possible for man to be white’と考えている²。

このアクリルの意見に対し、ホイテーカーやチャールズは異義を唱えている³。例

¹*De int.* 21b13-14. ‘πᾶν γὰρ τὸ δυνατὸν τέμνεσθαι ἢ βαδίζειν καὶ μὴ βαδίζειν καὶ μὴ τέμνεσθαι δυνατὸν’

²このアクリルの解釈は、チャールズも指摘するように、アンモニウスの解釈に基づいて構成されているように思われる。以降、アクリルの解釈として本論で説明されていることはほぼアンモニウスにも当てはまることであると思ってよいだろう。(cf. Charles, p.383, n. 8, Ammonius, pp. 223-224)

³ここでは、批判者としてひとまとめにしているが、ホイテーカーとチャールズがアクリルを批判す

えばチャールズは、アリストテレスは様相命題を ‘A is-possibly wise’ のように考えていると主張する。そこでアクリルが危険な省略であるとした ‘δυνατὸν εἶναι’ のような表現を部分として持つ様相命題はどのようなものであるのかを考察する。この考察を通じて、まずチャールズらのアクリルへの批判が妥当ではないことを示す。その上で、アリストテレスが様相命題をどのように考えていたかを再検討し、様相命題の構造がどのようなものであるかを明らかにするよう試みる。

そこで本論ではまず、12章の議論の展開をアクリルやホイティカーらの解釈と共に概観する(1章1節)。次に、アクリル等の主張を基にして、‘δυνατὸν εἶναι’ を部分として持つ様相命題は、‘ἄνθρωπον λευκὸν εἶναι δυνατόν’ のような形式の命題であるだろうということを確認する(1章2節)。そして、様相命題に対するアリストテレスの考え方について再検討する(2章)。再検討するにあたって、オッカムが指摘するように、アリストテレスは様相命題の言語的に異なる表現に対して意味上の区別をしていないこと(2章1節)、そして様相命題と無様相命題は同じ構造で考えられていること(2章2節)という、2つを前提とする。そして、2つの前提に基づき、様相命題の構造をできる限り明らかにする(2章3節と結論)。

1章 『命題論』12章の議論とその解釈

1節 12章の議論とその解釈

さて、初めに12章全体の流れを確かめておくことにする。12章の前半は、先程述べたように、様相命題の否定と肯定の関係を考察する為に、前段階として無様相命題の場合を先に考察している。その結果、無様相命題の否定は ‘εἶναι’ を否定することによって得ることができるので、無様相命題の場合も同じであると推測する。この推論によって、‘δυνατὸν εἶναι’ の否定は、‘δυνατὸν μὴ εἶναι’ という結論を得る(21a4-21b12)。しかし、すぐさまこの結論に対する反論をアリストテレスは行う。アリストテレスは、「同じものがあることも、ないこともできるように思われる(21b12)」として、先ほどまでの推論の結論に対する反論を始める。例えば、「歩くことができるものというのは、歩かないこともできる(21b16)」という事実を考慮するならば、「同じものを、同じことについて、同時に肯定して否定することが帰結する(21b19-20) ことになるのである。しかし、これは不可能である。それゆえに、‘δυνατὸν’ の理由は別のものであると思われる。詳しくは本文で後述する。(cf. Whitaker, p. 158, Charles, p.383, n. 8.)

είναι' の否定は "μὴ δυνατόν εἶναι" となる。アリストテレスはこの結論は他の様相にも適用されると述べ、その理由として以下のようなことを語る。

なぜなら、ちょうど上述の場合（「人間が白い」）について「ある」や「あらぬ」が付加物であり、他方「白い」と「人間」が「基体となる事柄」として生じているように、そのようにしてここでは、「ある」が「基体」のように生じていて、他方で「可能である(δυνασθαι)」や「あり得る(ενδεχασθαι)」が付加物であり、ちょうど先の場合に「ある」と「あらぬ」が「真」⁴を定めるのと同じように、「あることが可能である(εἶναι δυνατόν)」や「あることが可能でない(εἶναι οὐ δυνατόν)」の場合にはそれら（「可能である」や「あり得る」）が「真」を定めているのである。(De int. 21b26-32)

ここでも無様相命題と様相命題の場合が対比されて語られている。この説明では、肯定と否定に関わるものを 'προσθέσεις' (付加物)と呼び、そして 'προσθέσεις' が付加するものを 'ὑποκείμενον' (基体)と呼んでいる。そしてさらにこれと関連するようなことが述べられている箇所がある。

そして、すでに述べたように、一般的に、「ある」や「あらぬ」は「基体」として措かねばならないし、そして肯定や否定を作っているかのものどもは、「ある」や「あらぬ」に付加されなければならないのである。(De int. 22a8-10)

⁴ 'τὸ ἀληθές' の訳語。真偽を意味するものとして訳出したが、この語を22a13との関係で「事実」と訳し、突然様相を意味すると思えるならば、この21b26-32全体の訳が変わることになる。その場合この箇所は、「ある」が事実を定めるように、「可能である」や「あり得る」は可能性の様相を定めるということを主張していることになるだろう。しかし、この箇所でアリストテレスが言いたいことは、様相のオペレータが様相の内容をどのように意味表示しているのか、ということではない。アリストテレスは、様相のオペレータが否定の主張を作るために、どうして否定されるべきものであるのかを説明しているのである。それゆえ、対比して語られている「ある」を用いた無様相命題の場合と同じものを様相オペレータは定めるべきであり、それは真や偽であると思われる。

アリストテレスは様相命題の否定と肯定の関係を以上のように考えている。アクリルはこのようなアリストテレスの説明に基づいて次のように解釈しているように思われる⁵。この12章で考えられている様相命題はおそらく ‘ἄνθρωπον λευκὸν εἶναι δυνατόν’ のようなものであると考えられる。この時アクリルは、‘ἄνθρωπον λευκὸν εἶναι’ と ‘δυνατόν’ に分けて両者を繋ぐ ‘ἐστι’ を想定している。アクリルの言うとおりに命題を省略無しで書き表わせれば、‘ἄνθρωπον λευκὸν εἶναι δυνατόν ἐστι’ となり、‘ἄνθρωπον λευκὸν εἶναι’ という表現は、不定詞句として主語と見なせるし、見方を変えれば ‘δυνατόν ἐστι’ に従属している節とみなすこともできるであろう。アクリルの解釈はギリシア語の文法規則に基づいて、健全なものである。では、なぜアクリルの解釈に対して意義を唱えることができるのか。それはアリストテレスのテキスト、特に21b26-32から、別の文構造を読み取ることのできる余地があるからに他ならない。

ホイテーカーは21b26-32に見られる ‘προσθέσεις’ と copula を結び付けて考えているように思われる⁶。ホイテーカーによる解釈では、無様相命題の場合は、否定すべきものを探すことは copula を探すこととほぼ同義であるため、12章での議論は様相命題の場合に copula に相当するものを探すための議論と言える。つまり ‘δυνατόν’ は様相命題において copula の役割も負っていることが主張されているとホイテーカーは考える。‘δυνατόν’ は主語と述語を結び付ける役割と、その結びつきが可能的な結びつきであることを意味する役割を持っていることになるのである。このような考えに基づくホイテーカーはアクリルの解釈は誤りであると主張する。アクリルの場合、様相命題は ‘It is possible that a man is white’ という構造をしていた。しかし、ホイテーカーから見れば、否定は、主語と述語を結び付けているもの、つまり copula を否定することで得ることができるのである。この観点からアクリルの考える命題を見てみると、否定されるべきは、‘a man’ と ‘white’ を結び付けている ‘is’ が否定されるものなのである。それゆえアクリルの解釈は退けられねばならない。

⁵以下のアクリルの解釈の説明は、彼自身は英語で記しているものを、ギリシア語で再現している。再現にあたり、アンモニオスが使用している命題の例を参考にした。(Ackrill, pp. 149-150, Ammonius, p. 224)

⁶Cf. Whitaker, pp. 158-159. 以下のアクリルの批判もこの箇所からのものである。

一方、チャールズは別の理由でアクリルとは違う解釈を提示している⁷。彼は、12章の考察で用いられている‘δυνατὸν εἶναι’ という表現は、copulaである‘εἶναι’を修飾していることを表現している命題であると考え⁸。それゆえチャールズは、様相命題の構造は‘A is-possibly wise’ となっていると考える。この解釈の場合、様相を表現する語は、構文的には副詞として機能することになっている。それゆえ彼の解釈もアクリルの解釈とは異なることになる。チャールズの場合も基本的に否定される語というのは主語と述語を結び付けるものでなければならないので、アクリルの提示した‘It is possible that a man is white’ という構造では、副詞として機能するべき様相を表現する語と従属節を結んでいる‘is’が否定されることになってしまい不合理なものとなる。

ホイテッカーとチャールズの考えでは、そもそも命題とはcopulaを介して主語と述語が結び付けられているものである。そして主語と述語の結合と分離が肯定と否定である。copulaを否定することは、命題の分離であり命題の否定なのである。先の21b26-32の説明は、ホイテッカーの場合は、‘δυνατὸν’はcopulaに代わる要素としての位置を説明していることになり、チャールズの場合は、‘δυνατὸν’はcopulaを修飾している二つ目の付加物であることを説明しているということになるであろう。

2節 アクリルの解釈の妥当性について

しかし二人の考えには不都合な点があるように思われる。まずホイテッカーの場合、様相のオペレータはcopulaとしての役割をもっているため、同時に否定される役割を負っている。だが、‘δυνατὸν εἶναι’ という表現のなかの、‘δυνατὸν’が本当にcopulaとしての役割を負っているのかどうか疑問である。結局のところ、‘δυνατὸν’が否定や肯定の役割を負うことができるのは、アクリルの場合のように‘ἐστίν’が省略されていると考えるからではないだろうか。そうでなければ、様相のオペレータが例えば‘δύναται’のように動詞の形で現れていなければならないだろう。

他方でチャールズは、様相のオペレータがcopulaとしての‘εἶναι’を修飾している

⁷Cf. Charles, pp.381-383. なお、アクリルへの批判は、p. 383, n. 8

⁸チャールズの解釈は、『命題論』だけでなく、『分析論前書』にも基づいている(*Pr. An.* 29b29 ff.).

29b29 以下で様相のオペレータは、『分析論』でcopulaとして用いられる‘belonging (ὑπάρχειν)’を修飾しているとチャールズは考えている。(Charles, p. 381)

と考えていた。この解釈に従うと、様相命題の場合に基体と言われている‘είναι’は無様相命題の場合の「人」や「白い」などの言葉と同等の資格を有している。しかし、それ自体では意味を持っていないcopulaとしての‘είναι’が「人」や「白い」などの言葉と同等でありえるとは考え難い。そうではなくて、‘δυνατὸν εἶναι’の‘είναι’はcopulaのことを意味しているのではないと考えるべきではないだろうか。先に挙げた、21b12でアリストテレスは「同じものが、あることもないこともある」と言い、また「歩くことのできるものは、歩かないこともできる(21b16)」とも述べている。このとき、‘δυνατὸν εἶναι’の‘είναι’に当たる部分に「歩く」や「存在する」という意味での‘είναι’が対応させられているように見える⁹。ゆえにアリストテレスは12章での議論のなかでは、‘δυνατὸν εἶναι’の‘είναι’を一貫して述べ言葉¹⁰の代表として使用していると考えべきであり、copulaは念頭にないと思われる。

また別の点でも2人の解釈には不都合がある。ホイテーカーやチャールズの考えに則して考えた場合、‘ἄνθρωπον λευκὸν εἶναι δυνατόν’は主語を‘ἄνθρωπον’と措定することになるだろう。しかし‘ἄνθρωπον’は、そのままでは主語になることができない。なぜなら、アリストテレスは第2章の中で以下のように語っているからである。

そして、「ピロンの」や「ピロンに」やそういった類いのものは、名ではなく、名の語尾変化である。この語尾変化の定義は、以下の点以外では名と同じ定義に則している。すなわち、「ある」や「あった」や「あるだろう」と共に真や偽を示さない、という点が違うのである。他方で名は常に真や偽を示すのであるけれど、「ピロンのある」や「ピロンのあらぬ」がその例である。というのも、それらはまだ何も真や偽を示していないからである。(De int. 16a32-16b5)

τὸ δὲ Φίλωνος ἢ Φίλωνι καὶ ὅσα τοιαῦτα οὐκ ὀνόματα ἀλλὰ πτώσεις ὀνόματος.
λόγος δέ ἐστιν αὐτοῦ τὰ μὲν ἄλλα κατὰ τὰ αὐτά, ὅτι δὲ μετὰ τοῦ ἐστιν ἢ ἦν

⁹ただし、チャールズの主張は、「歩く」は「歩くものである」というように、分詞とcopulaで表すことができることに基づいている。命題はcopulaを用いて表すことができることから‘δυνατὸν εἶναι’の‘είναι’をcopulaとして理解することができるようになる。しかし、「存在する」という意味で用いられる‘είναι’は、分詞とcopulaに分離することが出来ない。この例外はチャールズの解釈に対する重要な反論であり得るであろう。

¹⁰述べ言葉は『命題論』の3章において定義されている。述べ言葉とされるものが、文法的な動詞とは異なるのは明確であり、copulaは述べ言葉から除かれているように思われる。

ἢ ἔσται οὐκ ἀληθεύει ἢ ψεύδεται, -τὸ δ' ὄνομα ἀεί,- οἶον Φίλωνός ἐστιν ἢ οὐκ
ἐστιν· οὐδὲν γάρ πω οὔτε ἀληθεύει οὔτε ψεύδεται.

この言及は、名詞や形容詞の格変化についてのものである¹¹。主格以外の名は主語としての意味を成すことはあり得ないことが主張されていると考えてよいであろう。それゆえに、名詞の対格である 'ἄνθρωπον' はそのままでは主語となる資格はないのである。それゆえ、ホイティカーやチャールズの意見をそのまま文の構造に適用することは出来ない。

以上のように、チャールズやホイティカーの解釈よりも、アクリルの解釈の方が妥当であると思われる。ところで、アクリルの提示した文構造の場合、可能様相は従属する文に対して適用される。しかしながら実際は、アリストテレスは可能様相を述語に対して適用しているように見える。アリストテレスにとって、様相のオペレータは命題を支配するのではなく、述語を支配するものであるならば、様相命題の構造は、アクリルの考えるものではなく、むしろチャールズやホイティカーらの考える構造の方が適当だろう。なぜなら、アクリルの考える命題は、様相のオペレータが文全体に対して影響を及ぼすものであるが、しかしアリストテレスはそうではなく、様相のオペレータが述語に対して影響を及ぼしていると考えているようにみえるからである。例えば彼は21b16で、「歩くことができるものは、歩かないこともできる」と言う。このとき彼は、可能様相は「歩くことのできる存在（例えば、ソクラテス）」が歩かないという事態が成立可能であると言っているのではなく、「歩くことのできる存在」が、能力として、歩かないこともできると言っているのである¹²。このとき、様相のオペレータは述語に対して作用しているだろう。そして述語に対して様相のオペレータが作用している構造はチャールズ等の主張する命題構造なのである。それゆえ、さらなる考察が必要である。

¹¹アリストテレスには名詞と形容詞の区別はないようである。この二つはまとめて名(ὄνομα)として分類されている。名の定義は2章(16a19-b5)で行われている。

¹²様相概念についてのより詳しい説明は、13章で行われている。13章では能力としての可能、不可能が議論に持ち出されている。

2章 様相命題の構造

1節 様相命題の表現の種類について

この不合理の原因は、そもそも様相命題として見なされうる文に複数の種類があることに由来する。様相命題は、様相のオペレータを文法的にどのようにして表現するかで、3種類に分類される。すなわち、オペレータを副詞にするか、形容詞（名詞）にするか、動詞にするかで区別される。オッカムはこの3種類の違いについて解説している。オッカムによれば、副詞と動詞によって表現される様相命題は同じ意味であるが、形容詞によって表現される様相命題は先の2つとは意味が異なるという。つまり、形容詞で表現された様相命題である ‘άνθρωπον λευκόν εἶναι δυνατόν’ は、de dicto様相の命題であり、他方で副詞や動詞で表現された様相命題はde re様相の命題であるため、厳密に区別されるべきなのである。このことに注意を与えた上でオッカムは、アリストテレスがde dicto様相とde re様相の区別をせず、3種類の命題を同じものとして考えていると言う。さらに、この点でアリストテレスは過っていると考えている¹³。

アリストテレスにおいてdedicto様相とdere様相の区別がなされていないという、オッカムに指摘は重要である。実際、12章の中で、「同じものがあることもないこともできる(δυνασθαι)と思われる」と言う時(21b12)や、「歩くことができるものが、歩かないこともできる(δυναται)」と言う時(21b16)は、動詞によって表現している。また、すでに挙げた21b26-32でも、動詞によるオペレータと形容詞によるオペレータが同じものとして使用されている。なぜなら、無様相命題における‘εἶναι’と対比させて、付加物とされているのは、‘δυνασθαι’という動詞の不定形であり、この‘δυνασθαι’が真や偽を示す役割を負っているからである。このことから、アリストテレスは、言語的表現の違いによる様相命題の区別をしていないことが伺われる。少なくとも12章の中での様相命題は、動詞によって表現しても、形容詞で表現しても、論理的には同じ命題なのである¹⁴。以上のことから、様相命題の構造における

¹³Cf. Ockham, pp. 465-466, ll. 170-177

オッカムは、命題が否定命題の場合の意味は、どの表現形式でも同じになるが、肯定の命題の場合に名詞による表現は異なると言っている。しかし、オッカムが挙げている例は、量化された命題であるが、『命題論』で扱われている様相命題が量化されているかどうかは不明である。どちらかといえば、量化されていない命題を考えているように見える。そのため、アリストテレスが本当に量化命題に対してもde re様相とde dicto様相の区別をしていないのかは明らかではない。

¹⁴この結果、そもそもチャールズやホイティカーによるアクリルへの批判は的外れであったと言うこ

言語表現上の差異は、論理的な差異とはなりえず、アリストテレスは同じであると見なしていたと言える。では、言語表現上では異なる様相命題に共通する構造として、アリストテレスはどのようなものを考えていたのだろうか。

2節 無様相命題の構造

それは、動詞によって表現される場合の様相命題によって理解される構造と同じであると思われる。なぜなら、動詞によって表現される様相命題、例えば 'ἄνθρωπος δύναται βαδίζειν' のような命題は、無様相命題の場合と同じ構造であると言えるからであり、同じ構造であるゆえに、否定と肯定の関係を対比して論じることができるからである。では、その無様相の命題の基本的な構造はどのようなものか。まずアリストテレスは、命題には述べ言葉かその語尾変化がなければならないとしている(17a10)。そして実際にアリストテレスが例示する命題から考えて、命題は主語となるべき名と、述語となるべき述べ言葉の二つの要素から成り立っていると考えられる。そして肯定や否定は、この二つの要素が結合しているか、分離しているかで表されるのである。『命題論』の主題が、さまざまなタイプの肯定と否定を見い出すことにあるとすれば、命題が肯定と否定を示す結合と分離を表すために、二つの部分に区別されると考えるは妥当であろう。それゆえ、『命題論』の中では命題はすべて、主語（あるいは主部）と述語（あるいは述部）の二つの部分を持つものとして考えられる。これが『命題論』の中での命題の基本的な構造である。

3節 動詞によって表現される様相命題

このような構造を、様相命題に対しても適用できると考えるべきである。しかし、問題は主語となるべき部分と、述語となるべき部分はそれぞれどれであるのかが問題となる。例えば、「人は歩くことができる」という文を考えることにする。このとき考えられる分け方としては、主語が「人は歩く」であり、述語は「できる」と考えることができる。また、主語は「人」であり、述語は「歩くことができる」であるとすることもできる。そして採用すべきは後者の分け方であろう。これまで観てきたように、アリストテレスは様相命題を一貫して de re 様相のように考えていたと考えられるからである。

ともできる。むしろ言語表現上の構造はアクリルに従うべきである。

すでに確認したように、様相命題において、言語表現上の文法的構造と論理的構造は必ずしも一致していない。アリストテレスにとって、形容詞によって表現される様相命題も、動詞によって表される様相命題も、論理的には違いはなく、どちらも主語と述語の二つの部分をもつものとして考えられているように見える。むしろ、動詞によって表現された様相命題の方がアリストテレスの考える命題の基本的な形であろう。つまり、様相オペレータは常に述べ言葉として理解されているのである。そして実際に12章の中でも動詞を用いた表現が使用されていることはすでに述べた。そこでその他に、12章の中で示唆的な箇所として、21b3-5の言及を取り上げることにする。

21b3-5においてアリストテレスは、'εἶναι μὴ λευκὸν ἄνθρωπον' という表現を 'τὸ ξύλον' に述語付けている。この 'εἶναι μὴ λευκὸν ἄνθρωπον' という表現は、12章の中で 'δυνατὸν εἶναι' や 'μὴ δυνατὸν εἶναι' と対比されて使用されている表現であり、通常は無様相命題として、つまり一つの文として理解される。しかし、21b3-5では、命題としてではなく命題の一部、つまり述部として使用されている。このとき、対比されている 'δυνατὸν εἶναι' や 'μὴ δυνατὸν εἶναι' もまた、同じように述部として理解することができるのではないだろうか¹⁵。このように考えるなら、'δυνατὸν εἶναι' という簡略化された表現は、初めから主部を問題とせず、述部の中で使用されている語のどちらを否定するべきかが問題となっていると解釈できる。そして21b26-32で語られている内容も今までとは異なるように読める。つまり、ここで言及されている「付加物」や「基体となる事柄」といったものは、すべて述部の中の話ということになる。無様相命題では 'εἶναι' が付加物、'ἄνθρωπος' や 'λευκόν' が基体となる事柄であったが、これらは命題全体ではなくて述部であり、述部の内で 'εἶναι' が付加物として否定や肯定のための役割を負っていることが主張され、それに対応する 'δυνατὸν εἶναι' という述部のうちで、否定と肯定の役割を負うのは 'δυνατὸν' であることが主張されているのである。

このように、'δυνατὸν εἶναι' という命題の部分が述部を表していると考えられる場合、'δυνατὸν εἶναι' によって表現される様相命題全体は、アクリルが言うように、'ἄνθρωπον λευκὸν εἶναι δυνατὸν' のようなものであるにもかかわらず、その文法的な

¹⁵アクリルは、アリストテレスが文と述部を明確に区別して使用しないことを指摘し、ここでの 'δυνατὸν εἶναι' も述部として理解される可能性があることを認めている。cf. Ackrill, p.149.

制約を無視したものとなっている。ここで、すでに一度退けていた、ホイティカーやチャールズの解釈を再検討することにする。21b26-32の言及を、ホイティカーは、様相のオペレータがcopulaとして機能していることを示すものと解釈していた。この解釈は、様相のオペレータが動詞として考えられる場合にはじめて受け入れられる解釈であろう。しかし、ホイティカー自身は様相のオペレータを動詞で表現するという考えを明確に打ち出していない。様相のオペレータは付加物であり、それは‘possible’のような言葉であると言っていることから推測するに、あくまで‘δυνατόν’がcopulaとして機能しようと考えているようである¹⁶。他方、チャールズの解釈はどうであろうか。チャールズは、様相命題は副詞によって表現されるものと考え、同じ21b26-32を、様相のオペレータがcopulaを修飾していることを主張しているものだと考えた。様相のオペレータがcopulaを修飾しているという考えは、21b26-32の解釈としては妥当であるとは言い難い。しかし、副詞的な表現によって様相命題を理解すること自体は可能であろう。しかし、『命題論』の中でアリストテレスは、副詞を用いて様相命題を表現していない。様相のオペレータを副詞として理解して説明しているのは、アンモニオスであり、彼のアリストテレス解釈がどこまで妥当であるかは、疑念が残る¹⁷。少なくとも『命題論』の中に、副詞的な表現で様相命題を理解する余地はないように思われる。

結論

アリストテレスが『命題論』の12章で使用している‘δυνατόν εἶναι’という表現によって構成される様相命題の言語的表現は、アクリルの説明する構造であることは認めなければならない。この点で、ホイティカーやチャールズがアクリルを批判するのは誤りである。しかしながらその一方で、様相命題の論理的な構造はむしろ、de re様相として、ホイティカーやチャールズの解釈のほうがアリストテレスの考える様相命題に近いと言える。‘δυνατόν εἶναι’と表現しているにも関わらず、アリストテレスの述べる様相命題の構造はむしろ‘δύναται’のような動詞によって表されるものであり、様相のオペレータは常に述べ言葉として考えられているのである。そのため、アリストテレスが12章で‘δυνατόν εἶναι’という表現を使用する時、その

¹⁶Cf. Whitaker, p. 159

¹⁷アンモニオスの様相命題に関する言及は、p. 214の他に、p. 8にある。

アンモニオスの命題の種類に関するアリストテレス解釈の問題は、水落によって指摘されている(水落, pp. 31-32)

‘δυνατὸν εἶναι’ は一貫して述部と考えるべきである。そしてこのような混乱の原因は、アリストテレス自身が様相命題の言語的表現の違いによって、論理的な違いが生じることに無自覚であったためであると考えられるのである。

文献

Ackrill, J. L., *Aristotle's Categories and De Interpretatione*, Oxford, 1963.

Busse, A. (ed.), *Ammonius, In Aristotelis De Interpretatione Commentarius*, Commentaria in Aristotelem Graeca, Berlin, 1897.

Charles, D., *Aristotle on Meaning and Essence*, Oxford, 2000.

Gambatese, A. and S. Brown (eds.), *Guillemi de Ockham Expositio in Librum Perihermenias Aristotelis*, (Opera Philosophica II) St. Bonaventure, N. Y., 1978.

水落健治, 「「命題の部分」と「文の部分」-Ammonios Hermeiou, *Commentaria in Arist. De Interpretatione* (p. 8. 29~p. 15.13) -」, 中世思想研究 41, 1999, 17-34.

Whitaker, C. W. A., *Aristotle's De interpretatione*, Oxford, 1996.